

学部新入生の皆さん、そして大学院に入学された皆さん、ご入学おめでとうございます。

また、これまで新入生の皆様を励まし、支えてこられたご父母をはじめとする関係者の皆様にも、心からお祝いを申し上げます。

本日、千川通りや武蔵学園内の桜の開花が進むなかで、ご来賓の皆様の前列席のもとに、平成二十九年度の入学式を挙行できますことは、私ども教職員をはじめ本学関係者にとり大きな喜びとするところであります。

さて、皆さんは、日本に幾つの大学があるかご存知ですか。現在、四年制の大学だけで七七九の大学があります。このうち私立大学が六〇四校で、全体の約八割を占めています。そして、この六〇四校の私立大学には、それぞれ固有の設立者がおり、固有の建学の理念や精神があります。

武蔵大学は、今から九五年前、一九二二年、大正十一年に設立された日本で最初の私立七年生高等学校である旧制武蔵高等学校をその前身としています。

この武蔵高等学校を設立したのは、幕末に甲斐の国の正徳寺村(今の山梨県山梨市)に豪商の子として生まれた根津嘉一郎という人物です。根津は政治家でもあり実業家でもありましたが、よく知られているのは、「鉄道王」とも呼ばれるように東武鉄道などの礎を築いたということでしょう。根津は一九〇九年、明治四二年、四九歳の年に、渋沢栄一が率いる渡米実業団に参加し、三カ月間をかけてアメリカ合衆国を一周してきます。この間、各地でアメリカの富豪や実業家が、自分が稼いだお金を社会に還元する目的で、学校や図書館、美術館を作っているのをまのあたりにして、強い感銘を受けることになりました。そして帰国後、根津育英会を設立し、武蔵高等学校をつくるのです。また、根津が亡くなったあとに建てられた根津美術館も社会貢献の一つと言ってよいでしょうし、スカイツリーの高さが六三四メートルであることも、武蔵学園とのつながりを示唆しているように思います。

さて、旧制の武蔵高等学校には、建学の三理想という校是がありました。

すなわち、第一に、「東西文化融合のわが民族理想を遂行し得べき人物」、第二に、「世界に雄飛するにたえる人物」、そして第三に、「自ら調べ自ら考える力ある人物」です。「東西文化融合」すなわち、日本文化と西欧文化の融合ということでしょう。例えば、後で祝辞を頂く有馬学園長は、わが国を代表する物理学者であるだけでなく、俳句の世界でも高名な指導者であり、世界各地に日本人以外のお弟子さんをたくさんお持ちです。また、日本のアニメが西欧で非常に高い評価を受けていることは皆さんもご存じの通りです。「世界に雄飛するにたえる人物」。今風に言えばグローバル人材の育成でしょう。「自ら調べ自ら考える」。これも今はやりの言葉を使えば「アクティブラーニング」と読み替えることもできるでしょう。

今から九十年以上前に作られたこの三理想は、百年近くたった今でも、立派に通用する内容であり、本学園の建学の精神をあらわしていると言ってよいでしょう。戦後の学制改革のなかで旧制武蔵高校は、新制の武蔵高等学校中学校と武蔵大学という二つの学校に引き継がれることとなりますが、大学として再出発した武蔵大学も、これまで六十八年間にわたって、この

三理想を教育の原点として位置づけ、絶えず立ち返るべき建学の三理想、建学の精神としています。

さて本学では、この「建学の三理想」を踏まえつつ、現在の武蔵大学が目指す教育の三つの基本目標を定めています。この三つの基本目標とは、まず三理想の中にもあった「自ら調べ自ら考える（自立）」、そして「心を開いて対話する（対話）」、最後に「世界に思いをめぐらし、身近な場所で実践する（実践）」です。

第一の目標、「自ら調べ自ら考える（自立）」とは、主体的に、また創造的に考えることのできる人物を育てようということです。高等学校までの学習の中心は、さまざまなる知識の記憶や、予め定められた正解にたどりつくための思考方法の訓練であったと思います。こうした学習も、もちろん必要です。しかし、皆さんがこれから大学で行う勉学は、これに止まるものではありません。

大学の授業において、興味を持って学び高い成果をあげるためには、ただ受動的に授業を聞きくのではなく、授業でとりあげられるテーマについて自分自身で問題を発見し、それを自ら主体的に考え抜くことが重要です。

学問はたんなる知識の集積ではありません。日々、新しい考えが示され、従来の通説が見直されることしばしばあります。学問研究の第一線で活躍している本学の教員に対して、皆さん自身の疑問を問いかけ、自分の考えを示してみてください。それによって皆さんも学問の神髄に触れることができるでしょう。大学とは、このように自ら積極的に、生き活きと学ぶ場にならなければなりません。

また、「自ら調べ自ら考える」力は、皆さんが大学生活を終えて社会で活躍する際にも大変重要となる力です。社会人となった皆さんが直面し解決を迫られる問題には、予め決まった解き方も答えもありません。自分自身で積極的に情報を調べ、自ら考え抜いて新たに答えを導きださなければなりません。大学での勉学を通じて、この力を充分に身につけて下さい。

次に、本学の教育の第二の目標、「心を開いて対話する（対話）」についてお話ししましょう。

ここでいう「対話」とは、相手の気持ちや話の内容を正確に深く理解し、自分の気持ちや言わんとすることを的確に相手に伝えるコミュニケーション能力のことです。このような「対話」を行うためには、お互いの心理や置かれている状況の理解力が必ずとなります。またそれだけではなく、相手の主張を論理的に捉えなおして理解する力や、相手を理解できるかたちで自分の考えを組み立て、これを伝える力が必要となります。こうした真の意味での「対話」力、コミュニケーション力は、今後皆さんが社会に出た場合に必ずしも求められるものだといえます。

武蔵大学には、「自立」して考える力や「対話」する力を育て上げる場が数多く用意されています。特に、一年次から四年次まで履修するゼミナールでは、自分自身が調べたり考えたりしたことを教員や学友に対して発表し、討論するというかたちでこの二つの力を育てることができます。主体的に学ぶことのできるさまざまな授業に積極的に取り組み、これらの力を大いに伸ばしていきましょう。

その際、六十五万冊以上の蔵書を誇る大学図書館を積極的に活用することをおすすめします。現在ではスマホやパソコンを使ってさまざまな情報を得ることができますが、生の書物や資料に触り、それらをじっくりと読み込むことは、学問の原点でもあります。図書館に常設されているパソコンに向かいながら、書籍や資料を読み込むという学習姿勢をぜひ身につけて下さい。また、本学図書館には「ディスカッションスペース」という、資料やインターネットなどさまざまな情報源を活用して、

それについて討論しながら学習できる空間もあります。こうした施設を有効に活用して自立的思考力と対話力を豊かにつちか培って下さい。

第三の教育目標、すなわち「世界に思いをめぐらし、身近な場所で実践する(実践)」については、次のことをお話ししておきましょう。

皆さんもご承知のように、二〇世紀末からグローバル化が大いに進み、今後その流れは一層加速していくことでしょう。皆さんが社会の中核的人材として活躍する十年、二十年後には今では想像できないほどグローバル化した社会となっていると思います。国際的な視点で物事を考え、それを職場や地域や家庭で実践することがますます重要になります。欧米の環境保護運動の中で生まれた標語に、「Think Globally, Act Locally」という言葉があります。「Think Globally」すなわち、地球規模で物事を考え、「Act Locally」今、あなたが生きているその場所で実践しなさい」という意味です。グローバルに考え、身近な場所で実践する力をつけることが、これからの社会を支えリードする人物となるために必須の条件であるといえます。

では、そうした力をつけるために、皆さんは大学で何をなすべきなのでしょう。

今まで述べてきた「自立」的な思考力や「対話」力は、国際社会で活躍するためにも大いに必要とされます。また、自分たちとは異なる社会や文化を理解すること、異なる生まれの人々を尊重し差別しないこと、いわゆる多文化共生の視点も重要です。そして、いうまでもなく外国語の力を充分に身につけることも不可欠でしょう。

外国語学習に積極的に取り組み、外国語の力を大きく伸ばして下さい。武蔵大学にはそれを支える仕組みが整っています。必修の授業だけでなく、「留学準備講座」など必修以外の授業にも積極的に参加して、外国語の力を向上させて下さい。

また、大学一号館三階には、武蔵コミュニケーションヴィレッジ、略称「MCV」という学習スペースがあります。ここでは、英語は大嫌いという人を対象とした初心者向けの会話レッスンから、より専門的なレッスンまで、さまざまなプログラムが用意されています。英語だけでなく、ドイツ、フランス、韓国、中国などとの文化交流プログラムもあります。

さらに一昨年から、正規の授業とは別に「TOEICスコアアッププログラム」を開始しています。こうした授業外のさまざまなプログラムを活用して、どんどん外国語や外国の文化を学んでいって下さい。

学内で学ぶだけでなく、日本に居ながら武蔵に通いながら、アメリカの名門大学の授業を受けることもできます。武蔵大学はアメリカの名門州立大学であるテンプル大学の日本キャンパス、すなわちTemple University Japan Campus(略称TUJ)と単位互換や図書館相互利用などの協定を結んでいます。夏には、TUJの先生方による英語の集中授業、English Summer Schoolが本学で開催されます。皆さんがこうした協定による単位互換やサマースクールに積極的に参加されることを期待しています。

さらに、日本で外国語を学ぶだけでなく、ぜひ世界へとばたいて下さい。世界に雄飛して下さい。夏と春には、三週間から五週間、集中して現地で外国語を学ぶ「外国語現地実習」があります。今年、イギリス、オーストラリア、フィリピン、ドイツ、フランス、中国、台湾、韓国の各国で実施の予定です。また、半年から一年間、留学することもできます。現在、武蔵大学には留学の協定を結んでいる海外の大学や教育機関が二十二校あり、これからも拡充していく予定です。

ところで、武蔵学園は、今から五年後の二〇二二年に、創立一〇〇周年を迎えます。この創立一〇〇周年に向けた学園の基本方針として、二〇一四年の春の理事会において理事長ドクトリンが採択されました。それは、「まなごしを世界に向

け、二十一世紀の課題を担う国際人を育てる学校を目標とする」というものでした。これを受けて同年秋の理事会では、「世界に開かれたリベラルアーツの学園となることを目指す」と題した学園長プランが定められました。こうしたドクトリンやプランに基づいて、学園の第三次中期計画が策定され、昨年度から六年計画としてスタートしています。この中で、武蔵大学は、大学の目指すべき新しいビジョンを「異文化を理解し未来を創造する教養あるグローバル市民の育成」としました。

そしてこのビジョンの実現に向けて、それぞれの学部の特徴を生かした新しいプログラムやコースを開始することにしました。まず経済学部において、一昨年の二〇一五年度から、「ロンドン大学と武蔵大学とのパラレル・ディグリー・プログラム」、通称PDPという教育課程をスタートさせました。これは、ロンドン大学のロンドン・スクール・オブ・エコノミクスが提供するカリキュラムを武蔵大学の先生が武蔵で英語で教えることで、武蔵に通いながら、武蔵大学とロンドン大学の二つの学位を取得するというもので、日本の大学では初めての試みです。武蔵大学の初代経済学部長であった鈴木武雄先生の夢が、「武蔵大学を日本のロンドン・スクール・オブ・エコノミクスにしたい」という願いであったことを思い起こすと、まさに六〇余年の歳月のうちに、その夢が実現しつつあると言ってよいでしょう。

(経済学部用)

このプログラムに参加されるPDP三期生の皆さんは、ぜひ四年間しっかりと学んで、武蔵大学とロンドン大学の二つの学位を取得して下さい。

(以下共通)

次いで、人文学部と社会学部では、今年度から、それぞれ「グローバルスタディーズコース」(通称GSC)と「グローバル・データサイエンスコース」(通称GDS)を開設します。

人文学部のグローバルスタディーズコースは、語学力を徹底的に鍛え、グローバル時代の世界と日本の文化について深く学び、外国語で表現できるようにすることを目的するプログラムです。このうち「英語プログラム」では、一年次からネイティブの教員のゼミに所属して、現代的あるいは歴史的な問題を英語で考え、その研究成果を英語で発表するトレーニングを行います。英語以外のプログラムでは、それぞれの言語について高度な語学力の習得を目指します。

社会学部のデータ・サイエンスコースでは、ネット空間に蓄積されたビッグデータを英語で社会的に分析する能力の育成を目指します。

(人文学部・社会学部用)

これらGSCやGDSという新コースに所属される皆さんは、四年間しっかりと学んで、異文化を理解し未来を創造する教養あるグローバル市民となることを目指して下さい。

(以下共通)

以上、建学の三理想と武蔵大学が目指す三つの「教育の基本目標」を紹介しながら、本学の教育の特色や新しい取り組みについて述べてきました。武蔵大学は勉強だけでなく、部活動やサークル活動にも長い歴史と伝統があります。きっと、皆さんお一人お一人にあった部活やサークルが見つかると思います。ぜひ、部やサークルでの活動、ボランティア活動などにも積極的に取り組んで下さい。

大学での四年間は今の皆さんにとっては、長いように思われるかもしれませんが、しかし、漫然と過ごしていると、成果をあげないまま、たちどころに終わってしまいます。大学院博士前期課程の二年間はなおさらです。四年後に卒業し社会に出るとき、あるいは、修士の課程を修了するとき、どのように成長した自分となっているのか、その姿を思い描いてみて下さい。そして、そのために皆さんに与えられた時間をどのように過ごすべきかを、今からじっくりと考えて下さい。

また、博士後期課程に入学された皆さんは、オリジナリティのある優れた博士論文を完成させて下さい。高い目標を掲げ、それに向かって積極的にチャレンジすることで、皆さんに与えられた大学生活あるいは大学院生活を、後から振り返って悔いのない充実したものにして下さい。

そうした皆さんの努力を私たち教職員は全力で支え、支援致します。

このことをお約束し、私の式辞の結びと致します。

平成二十九年四月二日

武蔵大学長 山崎哲哉